

18世紀英国文化のタティングを体験 六本木ワークショップで学生が奮闘 宮城学院女子大学



ワークショップでは英文学科の
佐藤美紅さんが編み方を指導

宮城学院女子大学（仙台市）は3月21日、第1回「ロップンギ・アート講座」をアトリエ諸岡（東京都港区）で開いた。開催のきっかけは、同大で英国文化の授業を担当している吉村典子教授のリレーエッセイだ。英国の美術や建築、デザインの歴史を専門とする吉村教授は、2月16日付に更新された同大ウェブサイト内のリレーエッセイで、研究員として約3カ月間在籍した米国イェール大学の英国美術研究所における作品「ヒル夫妻」を紹介。18世紀英国で描かれた肖像画であり、人物だけではなく服飾や嗜好品なども描かれていることから、当時の風俗や生活文化を読み取ることができる資料として授業でも取り上げていた。

これまで、ヒル婦人が手に持っている道具は「砂糖挟み」であると伝えられていたが、同研究所で実物を見てみると、美術書の図版では見えなかった一本の糸

が夫人の左右の手の間にあることに気がついたという。

帰国後、授業で学生に拡大写真を見せたところ、受講生の一人だった2年次・佐藤美紅さんから「タティングではないだろうか。幼い時に編んだことがある」という申し出があり、これをきっかけに真相解明へと迫っていった。タティングとは、「シャトル」と呼ばれる舟形の小さな糸巻きを使い、結び目の連続でレースを作る技法を指す。この情報をもとに検索すると、シャトルと糸を持つ女性の肖像画が数多く見つかったことから、18世紀当時の女性の典型的な持ち物だったことが分かった。

こうした背景のもとで、リレーエッセイの読者から開催依頼を受けて行われたワークショップでは、吉村教授による18世紀文化の解説やタティングの編み方を佐藤さんが参加者にレクチャー。佐

藤さんは「小学生の頃に出会ったタティングに、このような形で再会するとは思ってもいませんでした。ワークショップでは、伝えることの難しさを改めて感じましたが、言語学のゼミナールではこの経験を活かして学びを深めていきたいと思えます」と、コメントを寄せた。

吉村教授は「タティングという検索ワードによって、この手芸が描かれた肖像画に出会うことができました。私たちの周りには、無限とも言えるほどの膨大な情報がありますが、適切な言葉やプロンプトがあって初めて有効なアクセスができるように思います」と、今回の出来事を振り返った。今後は、同大でもオープンキャンパスなどでワークショップを開催する予定だ。